

柏崎刈羽原子力発電所の透明性を確保する地域の会第7回臨時会概要

日 時	平成22年6月23日（水） 18:00～19:35
場 所	おくい 1F会議室
出席委員	浅賀、新野、伊比、上村、川口、久我、佐藤、三宮、高橋(武)、高橋(優)、武本、前田、牧、三井田、宮島、吉野委員 以上16名
欠席委員	天野、池田、鬼山、関口、高橋（義）、滝沢、中沢、萩野委員 以上 8名
その他出席者	原子力安全・保安院柏崎刈羽原子力保安検査官事務所 竹本所長 資源エネルギー庁柏崎刈羽地域担当官事務所 七部所長 新潟県 山田原子力安全対策課長 熊倉原子力安全広報監 柏崎市 駒野防災・原子力課長 野澤主任 刈羽村 武本総務課長 東京電力（株）長野副所長 西田技術担当 森地域共生総括 GM
事務局	柏崎原子力広報センター 井口事務局長 石黒主事

- 「地域の会の役割」について再確認をはかり、また日頃感じていることなどについて意見交換を行った。

◎会長挨拶

定例会では時間的に組み込めないが大切な話し合いという位置づけで、臨時会を開いても十分価値があるということで設定した。スタート時は会則だけがあって、具体的任務は何もないまま手探りで7年を過ごしてきた。積み重なった事実があるだけ。その関連の方と現委員がそれをどう評価し、過去と未来をつないでいくのかという話にもなると思い。会則を基本とし、もう一度ご理解いただくために時々必要なのかもしれないということで配った。

今日は、本当は会議場のようなところでやるべき会だが、きちんと議論ができ移動時間を短縮して1分でも長く皆さんに自由発言していただくため会場と懇親会場を同じにした。県のご協力もあり快くご了解いただいた。

一言でも多く皆さんの意見を述べていただきたい。

【会の役割・あり方・進行】

◎委員

- ・基本的には今のままでいい。それぞれが思っていることを聞き、自分が聞くこともある。そのことに対する回答など、いろいろなことを聞くことで、非常にいろいろな視野から発電所というものが見えるし、不具合の現状などもよくわかる。
- ・議題を運営委員会で決めそれで進めている。決められない議題の中での話し合いをもう少し増やしたほうがいいと思う。今のやり方は非常にいい。

◎委員

- ・今年で4年目になるが、この3年間は本当に地震だけに議論が集中した。やっと原発自体の安全についてゆっくりと話し合える時期に来た。今までのような根掘り葉掘り的な安全確認よりは、運転に対する保安上の見方が違ってくると思う。少し落ち着いた違う意見が出てくるのではないかな。少し余裕を持って原発の状態を見たい。

◎委員

- ・会の議論の雰囲気が発足当時と若干変わってきたと感じる。委員が入れ替わったりしたことで少し変わってきたのかなと感じていた。発足当時、反対、賛成、中間的な意見の方、それぞれの立場を尊重しながら議論してきた感じがあったが、トラブルや地震以後の中で、ずいぶん激烈な議論になってきた。空中分解しなければいいかという思いも一時あった。
- ・そういう意味では、もう少し落ち着けばそれなりの議論ができるのではないかなという見方もあると思うが、時々地域の方の会則やあるいは臨時会を通じて、原点に戻った議論をしていかないといけないと思う。会の出発点は、「賛成、反対、中立のみなさんも含めて、初めてこういう席を設けて議論をやっていく」ことだった。そのことだけは十分に補償され、なおかつお互いに誹謗中傷することではなく、立場を理解しながらやっていくことが今後も必要。

◎委員

- ・初めてそういうことを聞いた。中越沖地震以後の議論からこの会に入ったので、あまりにも強烈な意見が出過ぎると感じていた。「透明性を確保する」ではなく「透明性を検討する」会のような気がしていたが、そういう説明があるとそれなら名前にあった

会だと思う。

◎委員

- ・地域の会は、会則を見ると「発電所がある地域」の会。いわゆる柏崎市、刈羽村、旧西山町。そうではなく、「自分の地域から出ている地域」の会員だと思っている。自分の地域に対してどうPRし、意見を吸い上げられるかという考えもあると思う。
- ・日本の技術には素晴らしいものがあり、よほどのことをしなければ、どうにもならないような事故は起きるはずがないと思っている。だからわからないなりに自分の地域でも大丈夫だと話している。
- ・地域みんながそんなに重要に思っていないのではないか。だから、「地域の会」と私の住んでいる地域に対して、私たちがどういうふうにしていけばいいのか、まだはつきりわからない。今4年目だがそういう感じがあり非常に難しい。

◎委員

- ・課題が難しく理解できないこともある。内容の難しさ、それを自分の中で消化するにはとても大変なことがたくさんある。発電所の存在自体が柏崎刈羽地域にそういうもの投げかけているのだろうと、自分なりに言い聞かせ周りの人に聞いたりして理解に努めている。
- ・放射能等の難しい内容は、どうしても自分の意見が感覚的になりやすい。女性、主婦の立場で物が言えることも大事だが非常に大きい問題が多過ぎる。
- ・いつも問題が明快に解決していくわけではないが、いろんな意見を聞きながらみんなで考えていくことでは、みなさんの真剣さなどを自分の中に取り入れていくには大切な会。

◎委員

- ・委員になってからは地震や活断層の問題がほとんどで自分なりの確認をするのが精一杯だった。そういう意味で、この地域の会ができた原点に帰ることは大事。
- ・国の政策を私たちはなかなか知ることができないが、オブザーバーからいろいろな話を聞くことができ、一市民としても知ることができる立場にいることは非常にいいことだ。市民にとっては難しい問題があるかもしれないが、こういう会があることは、いつでも知る機会があるので非常にいいことだ。

◎委員

- ・発足当時からいるが、8年前は空中分解するのかなというのが素直な気持ちだった。その中で互いに自制というような気持ちもあったのだろう。それで続いたのではないか。8年前と比べればずっと良くなった。
- ・委員には、25分の1の発言の権利があるが、例えば1時間だと一人2分しか発言できない。長く発言するのが悪いわけではないが同じような発言を何回もする人がまだいるというのは気になる。会として時間を守るには、一人でも多くの人が発言する機会を自分も作るという意識を持って発言してほしい。

◎委員

- ・いろいろな立場の人の意見を聞く事ができてすごく視野が広まり勉強になった。難しい課題だが、会長や運営委員はすごく努力して良い運営をしており、透明性を確保するという点で非常に貴重な役割をしていると思う。

- ・推進、批判、慎重という三者が混じってというのが他ではない会なので、原発の地域だからこそその必要性がある。科学技術は素晴らしい面もあるが大自然はときに人類の知恵が及ばない大変なことが起こるので、できるだけしてできた会だと思う。
- ・「透明性を確保」という点についても、議論していく中で、説明する側もわかりやすいように努力しているし、質問する側も言葉使いや説明の仕方、問題提起の仕方など考えるようになり、会全体として知恵がついて、市民の方、オブザーバーの方、マスコミの方との橋渡しの貴重な役割を果たしていると思う。
- ・当事者が出す細かい問題に対して、その場ではなかなかわからない。あとになってよく考えてみると疑問が出てくることもある。長い目で見て、より問題をはっきりさせていく努力をしていく必要があると思う。
- ・国や保安院には専門家が多くいるが、政治的、経済的立場の方が優先されやすい。地域の声を反映する点では、県の技術委員会がそういう方向を出しやすい。批判的、慎重的な専門家もいるのでそういう人との交流が必要と思う。専門的と住民的なギャップを埋める努力をする上でも、県の技術委員会に対する質問を出したり回答を求めたりする必要があると思う。

◎委員

- ・5、6年以上委員をしているが、最初は透明性や安全性は会議などしても確保はされないだろうと思っていた。でもみなさん真剣で、結果的にはそのことが刺激になって行政も企業も、住民に対する考え方が非常に透明性を確保する方向に動いたと思う。
- ・安全性はもともと確保されていたと思っているが、その中でもいろいろな問題が起こり、不祥事と称される問題もあった。
- ・以前、「賛成派、反対派どちらにとっても、地域の会はいわばガス抜き。何か目立ったことをやっているのか」と聞かれたときに、会の議論や意見が取り入れられ、いろいろところで改善されているのだと言ったことがある。その基本の考え方は間違っていないと思う。
- ・この会は意見がまとまることは永遠にないだろうという諦めもあるが、今後も真剣に各委員がそれぞれのバックボーンを背負い、また個人の考えを持って会の中で切磋琢磨すれば自ずと正しい方向に行くのではないか。

◎委員

- ・3年経ったが、この会は賛成、反対、中立がいるからこそいい会だと改めて思う。最初は意見のぶつかり合いを見てドキドキしていたが今ではそれを楽しみ、また、自分なりの意見が出せる会だと思っている。結論が出ない会とはいえ、議論のあり方を誠実に伝えることも地域住民に必要。

◎委員

- ・面倒な議論についていくのが大変という意見があったが、委員として聞くだけでも勉強になる。8年経っていても、委員からいろいろな意見が出て議論することで勉強になる。発言することだけが委員の仕事ではなく議論を聞くことで自分が高まっていけばいいのではないか。
- ・この会の存在は、原子力行政を取り仕切る国、あるいは東京電力にとっては、歓迎されていないのではないかと思うと同時に、もう一面では、自分たちでは非常にいい会

だ、会議だと思っていながら、そんないいことならもっと全国に広がってもいいのではないかとも思う。

- ・ただ、国の役人は2、3年経てば異動していく中で、こういう生の声を聞くことは、個人にとっては非常にプラスになるのかも知れないと感じる。

◎委員

- ・今後どうなるかというよりはできるだけ続けていけばよい。

◎委員

- ・地域全体として見ると、ああでもない、こうでもないと言う人がいるから、同じ一つの事象でも隠さないで言わないといけないとか、あれこれ言われぬように今わかっていることをすべて公開しようということがある。地域全体にとってはブレーキがかかるところはブレーキがかかっていいのではないか。

◎委員

- ・東京電力もこの会を世論として、ある程度利用しているのではないか。東京電力は、地域の会で我々が検討して発言したことを取り入れて発表している気がする。

◎委員

- ・それがこの会の目的のひとつでもある。

【マスコミ】

◎委員

- ・運営委員会で、マスコミとの関係を今後どうしていくかよく話題となる。推進、反対含め、語尾や見出しのつけ方にわざとらしさが見えるところがたくさんあるが、伝える場がない。情報は推進、反対関係なくきちんと出してほしい。それが『視点』のいいところと感じている。今後の課題のひとつと思う。事業者も国もすごく言葉を選んで発言するが選んでいるから伝わらないジレンマがある。揚げ足をとられないように丁寧に説明すればするほど私たちには伝わらない。

◎委員

- ・顔や能力が違うのと同じように受け止め方も違う。特に原発のことは難しい。マスコミも柏崎に来て2年くらいですぐ変わる。そうすると、国や電力会社はいちいち噛み砕いて教えるわけにもいかずもっと大変だと思う。

◎委員

- ・マスコミに言うたびに何か違ってくる気がする。だからやはり伝えねばならないと思いい伝えるようにしている。顔を合わせるのは無駄ではない。

【会則】

◎委員

会則をみんなで読み合わせたことがないので一部、読み合わせてみたい。

(目的) 及び (会及び委員の権利と責務) (略)

- ・自分の活動と地域との相互コミュニケーションが非常に難しいという意見があった。本当に難しいと思う。まずは第1条の活動をせよということで、こういうことをしているといずれ何かがあるのだと思う。

- ・この会則は非常によく練られ言葉少ないが、意味合いは非常に重くいろいろなものを含んでいる。
- ・委員は各種団体から推薦されるが、活動としては個人として参画するという事になっていたと思う。会から推薦は受けていても住民だという視点に重きがあると解釈している。その母体の背景を背負い仲間の意見を当然反映しながらも、一住民として発言する委員と解釈している。

【県外視察】

◎委員

- ・県外視察という活動をやっていた。一泊二日のハードな行程だったが、行きと帰りでまったく違った。参加したある委員が、「委員それぞれの考えや立場、日頃の生き方が自然に伝わってきて、それ以降の定例会が非常に居心地がよくなり、相手の意見がよくわかるようになった」と言った。年々、チームワークがよくなり相手の意見を尊重する意識が高まったと感じた。
- ・予算が削減される中で、県外視察に相当する額が削減され結果としてなくなった。どうなるのかと思ったが、やはり最近入られた委員にはそういう体験がないので難しい。会を維持して深めるには委員同士の信頼がないと難しいと思う。県外視察は非常に有効だったと思う。懇親会を何度か行ったが出席者が限られてしまいそれが残念。夜の時間が割かれ負担が大きいので当然なのだが、解決策がないので一緒に考えていただきたい。

【情報誌『視点』】

◎委員

- ・委員としてみれば非常に素晴らしい内容が書かれていると思うが、一般市町村民から見るといまいちという感じを受ける。『視点』を見てどうですかと聞くと、中身がちょっと難しくてわからないと言われる。また、活字が多すぎるという方が非常に多い。特に年配者には、字が小さくて見えないので読まないという方がいる。このあたりをもう少し工夫する必要がある。

◎委員

- ・住民の知る権利が確保されている点ではその権利に込んでいると思う。地震発生時から発生後と経過をたどる中で議論の中身も変わっていくと思う。

◎委員

- ・投稿原稿の依頼に行くと、見たことがないから以前のもを持ってきてほしいと言われてたりする。もう少し柔らかな編集で読者が「これ、なんだろうな」と思うものが出せたらいい。

◎委員

- ・見ているという人が多くなった気がする。同じ誌面で賛成、反対両方の意見が出てくるものはほかにない気がする。両方が一つの誌面に出てくると読んだ人が判断する余地が出てくると思うのでとてもいい。そういう意味で会の存在意義はある。

【定例会・任期・推薦団体】

◎委員

- ・自分にとってこの会は負担が大きいのは事実。かなり成熟してきた会とは思いますが、負担を考えればそろそろ月一回ではなく、二ヶ月に一回でもいいのではないかと。大きな議論があるときは臨時会を開く、または会議を年6回ないし8回程度の開催にするなどしてもいいのではないかと。

◎委員

- ・8年目になる。委員任期は2年だが重複もあるので同じ人がずっと委員をやる方がいいのかということも考えていかなければならない。ただ、今のままでぱっと変わってしまうと、この会自体の存続性が損なわれるので、それも意識して考えていくことも必要。

◎委員

- ・「会が認める各種団体」というのがあり、その団体は発足時に指名された団体に限定されている。全体の一割を公募枠とするような形をとれないかだろうか。
- ・いろいろな立場の人が自由に発言できるのは、地域の会以外に見当たらないという状況があり、それでいいのかを考えたときにどうあるべきか気になっている。
- ・地域の人への関心は、もういろいろなことをわかってはいるが変わらないということもあって、仕方がないという諦めのような感じがあるのではないかと、それでいいのか、という捉え返しのようなことを今、している。問題がだんだん難しくなる中で、原発とどう付き合うのか問われている気がする。
- ・それで、例えば公募で手をあげた人は積極的ではないだろうかという思いもあり、そういう形で新しい人を入れていくことを考えたい。いろいろ困難はあることも含めてそう感じている。

◎委員

- ・公募について。してもいいのかもしれないが当初は地域住民の、ある程度バランスを持って開始したはず。私たちの使命とここの究極のあり方は「バランス」と思う。地域住民の意見だといって誇れるのはバランスがあるから。公募した場合、内部でジャッジするのは非常に厳しい。理想としてはわかるが現実的にはバランスを保つ委員を維持することが非常に難しいと思う。

◎委員

- ・「わかりやすい議論、説明」という意見があったが、この会では本当に永遠の課題だと思う。お互い努力するしかないし、元々、少々勉強しただけではわからないものに立ち向かっているから、そういう意味では1期で辞めるのもどうか。私の場合は8年。あまり長くいるのもいかなものかと感じる。

【コミュニケーション】

◎委員

- ・中越沖地震は我々にとって大変不幸だったが、国、県、市村というオブザーバーと委員との関係では、大きな情報提供をしている意味で、この不幸な事態でコミュニケーションが非常に良くできた。知識を得ることができたこともよかった。

◎委員

- ・原発の供給側と地域とでは、非常に大きなギャップがあった。なぜなら、原発側は技術的な面にウェイトを置いて説明しようとするが、受け止めるほうは、それを理解するベースがまだない。チェルノブイリの原発事故などが強くイメージにあり、感覚的、感情的に、「これはわからないけれども危ない」ということがあり、そこに大きなギャップがあって大論争になったと思う。それを埋めるためには相互で話しやすい基盤が醸成されなければいけない。その役割にこの会は非常に成果をあげてきたのではないか。
- ・技術とは、元々は必ずどこかに不具合があるもので、それを解決していく上で育っていくものと思っている。そういう意味で、施行や設備面等での信頼性というのは、あまり技術的に理解できない人に、いかに感覚的に受け止めてもらえるかが、供給側にとって大事なことだと思う。
- ・良い意味での緊張感は大事。話しやすい、本音で話すという状況がだいぶ醸成されてきて、今後もそのようになっていくのではないか。

◎委員

- ・技術的なことはわからないが、仕事上、突発事項はすべて自分に回ってくるという仕事をしており、そういうことに慣れているため、会議は自然体でいられる。素晴らしい会だといつもわくわくする。コミュニケーションは正當に諮られるべきと考えており、何か不具合があれば、それを何とかして通じるようなものにしたいという意欲を持っている。
- ・客観的にこういうものを研究する方が今、ものすごく増えており、専門家の研究に、「地域の会」はかなり高い頻度で出てくるようだ。時々講演などに呼ばれるが、賛否や技術ではなくコミュニケーションとはこうあるべきで、日々こういうことに委員が取り組み、いろんな考えはあるがそれぞれは否定せず尊重するように努力をしていると伝えている。委員の活動が正當に評価されるように伝えていきたい。

【その他】

◎委員

- ・もんじゅについて。稼働後、よく警報が鳴っている。特別な警報による安全装置があるとはいえ、あまりにもその警報を無視して大丈夫だと言っている気がする。見直す必要もあると思う。

◎委員

- ・「透明性を確保」という言葉は、この会の存立の根本に非常にぴったりのネーミングだと思っている。

◎委員

- ・委員になって初めて原発の勉強をさせてもらっている状態で、ついていくのがやっとだが、一般市民はみんなそういうところがあるのではないか。
- ・海が目の前で、原発の温排水などがいつも身近なところで生活をしているので、そういう細かいところがわかったらいいなと思う。

◎委員

- ・事業者も国も県も市村も、この会の意見は非常にいいサンプルになってマニュアル作りにいいのではないかと考えているが。

◎委員

- ・自分の反対運動に対して反対していた人間が福岡県に行ったが、そこでも玄海のプルサーマル問題があり原子力発電を考えざるを得なくなった。そのときに企業や行政の取っ掛かりがない。取っ掛かりがないという点では、この会はやはり異色でありながら大事な会と思うので、行政や企業はどう思っているか気になる。

◎会長挨拶

講演などで、コミュニケーションのことでいろいろな話をさせていただくときは、「地域の会」は住民の意思を反映させたバランスがとても大事な会で、その点にとっても配慮していることと、ほとんどすべてを私たちの意志で決めさせていただき、資金面も気にしないで思う存分やらせていただける恵まれた会ということも伝えるようにしている。

オブザーバーは本当は一番重要な立場。私たちはヒントを生み出す役割。それを聞いて自分たちの仕事の中でどう取り込んでいくか。できるのは頭脳と行動力があるオブザーバーだけ。行く行くは、誰でも、オブザーバーとも何でも言いたいことを言い合える会になるといいと思う。

いつもオブザーバーには無理を申し上げているが心の中では一番の主役だと思っているので今後ともよろしくお願ひしたい。